

## ダンスホール・ゴスペルで表象される「ラディカル」なキリスト教徒男性のイメージ

二宮健一(神戸大学大学院国際文化学研究所)

本発表では、近年ジャマイカで成長しているダンスホール・ゴスペルで表象される「ラディカル」なキリスト教徒男性イメージに注目し、その男性イメージが現地の人々の間に引き起こしている多様な反応を整理する。

ジャマイカは教会の数が非常に多く、キリストが人々の生活と強く結びついた国だといえる。もともとプロテスタントが主流のため福音主義的な土壌があり、「キリスト教徒」とは回心をして「救われ(saved)」、それまでの「罪深い(sinful)」生活を捨ててイエス・キリストの教えに従う生活をする者だという観念があるが、聖霊の洗礼を受けて「生まれ変わる(born again)」ことを強調するペンテコステ派の影響が20世紀半ばに増大してからは、この観念は強められていると言える。

一方、ジャマイカではダンスホール文化も大きな社会的影響力を持っている。「ダンスホール」とは、路上や広場などに「サウンド・システム」と呼ばれる巨大な音響設備を設置することで創出されるダンス空間である。ダンスホールからは次々とファッションやダンスの流行が生み出されるが、女性のファッションにはセンシユアルなものも多く、ダンスもまた性的な含意をもつものが多い。ダンスホールでは酒類、タバコ、マリファナの売買・消費も行われている。また、「ダンスホール音楽」は「ディージェイ(Deejay)」と呼ばれる歌唱法(その歌い手もDeejayと呼ばれる)やダンス向けのリズムで特徴付けられるが、その歌詞には「ガン・リリック(gun lyric)」と呼ばれる銃の比喻や銃撃戦の描写で自らの強さを表現するものや、「スラックネス(slackness)」と呼ばれる性的に露骨な内容のものも多く見られる。

ダンスホール文化に見られる上記のような要素は、当然のことながらキリスト教の倫理に反するものとしてみなされている。それゆえ「キリスト教徒」は、しばしばダンスホールを「悪魔的な(demonic)」などと呼び批判する。ところが近年では「ダンスホール・ゴスペル」と呼ばれる音楽ジャンルが成長している。これはダンスホール音楽の技法を使ってゴスペルを歌うものである。歌い手の「ゴスペルDeejay」たちの多くは、Deejayたちのキャリアの途中で回心してキリスト教徒になっており、かつての経験を積極的に作品の中で歌ったり、「証し(信仰告白)」で語ったりしている。彼らの活動の場は主に教会の催しや伝道集会である。

彼らの活動が持つ効果については「キリスト教徒」の間でも期待をよせる声が聞かれるが、同時にダンスホールの要素を教会文化に持ち込むことに対する反発や、ゴスペルDeejayたちの素行に対する疑念や批判の声も聞かれる。それらの様々な声のせめぎあいの中で特に問題とされているのは、ゴスペルDeejayたちの男性イメージであるように思われる。従来ジャマイカでは、回心をして「罪深い」婚外性交渉・婚前性交渉を絶った「キリスト教徒」の男性は他の男性から「ソフト(soft)」という嘲りを含むイメージで語られることが多かったが、ゴスペルDeejayたちは、歌や「証し」の中でそのような嘲りに対して論駁しつつ、ダンスホール文化で称揚される「ギャングスタ(gangster)」「バッドマン(badman)」といった男性イメージにも似た「ハードコア」「ラディカル」な男性イメージを作ろうとしている。その男性イメージの形成は従来の教会が声を届かせることが出来なかったストリートの男性たちに訴えかけることを可能にし、彼らを「救う」ための有効な手段となるとの当人たちの主張も聞かれるが、その一方でそのイメージは彼らが回心以前と変わっていないのではないかという疑念を招く原因ともなっている。

本発表では、このように多様な理解を招く「ラディカル」なキリスト教徒男性イメージを、ジャマイカをはじめとするカリブ海地域の男性性研究で論じられてきた「reputationの価値体系/respectabilityの価値体系」「黒人男性の周縁化」「覇権的男性性」といった理解枠と関連させながら考察することを試みる。

【ジャマイカ、キリスト教、ダンスホール、男性イメージ、ゴスペル】